

くの濾している場面の印象がうすれてしまっているのが残念。なお「濾すの字」は「漉の字」でよかった。

兄と行くこの秋一番の寒い朝歯の無い口を子は食い縛る 堤幸子

まだ乳歯が生える前の赤ちゃんらしい。「歯の無い口を……食い縛る」が、なんとも可笑しく、明るく楽しい一首となった。ただこの場合は「兄と行く」は不要だったように思える。

装飾を施したるうへ口縁に紐の通し穴 太鼓といふ 津幡昭康

縄文土器をうたう八首。現時点では各説あつて謎が多いところを、謎は謎のまま歌にする工夫がなされていて、なかなかの出来映えだ。ただ場面が分からない。発掘現場ではないらしいのは分かるが、博物館なのか、事典類の写真に取材したのか。読者は、今一つ、作者と感覚を共有できないもどかしさを感じるのが、残念。

震災後最初の正月帰省する同僚増えて静もるオフイ ス 森屋めぐみ

気のせいか例年の正月休みとはやや違っているオフイの空気。そんな微妙な空気が読み取れる点に注目。ただ、「増えて」はいかが。「多し」「多く」のどちらか、「多し」がいいか。

雪起しにばりばり裂けてゆく空のあたらしくしてふ るさとはあり 塚本瑞江

歌のかたちとしては、「……空の」までが「あたらしく

を起こす序詞になっている。「あたらしくしてふるさとはあり」が主文だ。「雪起し」は、雪が降り出す予告のように鳴る雷のこと。新潟、富山、石川、鳥取など、雪が多い日本海側の土地でよく聞く言葉。序詞がいい。

明滅する表皮細胞ヤリイカが海へ帰せと激しく迫る 加賀谷実

あるいはまだ生きてゐるヤリイカである。「明滅する表皮細胞」が、うまい。釣り上げたばかりのヤリイカか。春遠し西風強き瀬戸内海金属音をかすかに伝ふ 祖母井美香

ポイントは下句。とくに「金属音」。じつさいに何か聞こえるのか、それとも聞こえるような気がするだけなのか。西風が運んでくる遠い船の音か何か、と読むのがふつうだろうが。

ほの香る柚子湯浴み得つ老い二人生きて今年の大年 越えむ 田中江子

「心の花」のもっとも古くからの会員である田中長三・江子ご夫妻である。お二人ともアラフォーならぬアラナインティ。新たな年を迎える感慨である。

帰還困難区域居住制限区域避難指示解除準備区域内に 帰れぬ人 本田一弘

この歌の前に「避難区域屋内待避区域計画的避難区域緊急時避難準備区域」という全部漢字の一首がある。行政の言葉・役所の言葉の体温欠如をクローズアップ。